

論文

高専生のリスニングにおける単語認知改善の 取り組みと意識調査に関する考察

米崎 啓和¹

¹ 一般教育科－英語 (Liberal Arts-English, National Institute of Technology, Nagaoka College)

A Case Study on Improving Word Recognition in Listening for Technical College
Students and the Survey Results About their Listening Challenges

Hirokazu YONEZAKI¹

Abstract

The aims of this study are threefold. One is to identify the skills in listening that technical college students assume they lack. Another is to verify whether technical college students can get some hints on improving their listening comprehension after several times of treatments concerning word recognition, which is quite challenging to Japanese EFL learners, given a huge difference in the phonological system between English and Japanese. The third is to examine whether there is any correlation between their listening comprehension levels and their skills in word recognition. The results showed that the participants think they are lacking in various skills necessary in listening comprehension including vocabulary and syntactic knowledge as well as phoneme identification. Furthermore, about half the participants identified what is challenging to them in listening after the treatments. Finally, a Pearson product-moment coefficient suggested a statistically significant but not very strong relationship between listening comprehension and word recognition, and word recognition has been found to account for about 35% of overall listening comprehension.

Key Words : *listening, word recognition, challenges in listening*

1. はじめに

英語力とは本来 4 技能の観点からバランスよく測られるべきものであるが、最近、文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(平成 25 年)¹⁾にも謳われているように、とりわけ発信の技能、中でもスピーキング力の育成が重視されることが多い。しかし、受信技能とは違い、発信側の技能は短期間でレベルを上げていくのはなかなか難しい。ライティングやスピーキングで英語を使用することは、語彙力増強をはじめ英語学習の基

礎となるものであるが、そのためにはその元となるインテイクの量を増やす必要がある。そして、インテイクの元となる理解可能なインプット、すなわちリーディングとリスニングを大量に与えることは、第 2 言語習得理論の基礎をなすものである^{2),3)}。

従って、英語力を上げるためには、まずリーディング力とリスニング力を伸ばす必要がある。一方、多くの大学生及び高専 4 年生が資格試験として利用する TOEIC テストもこの受信の 2 技能を測っている。TOEIC のスコアが広く社会で重要視されている現実を鑑みると、高専においてもこれら受信の 2

技能を伸ばす必要性が再確認できる。

ところで、本研究の参加者である高専 4 年生 203 名が当該年度（2014 年度）に受けたリスニングテストとリーディングテストの結果は $L > R$ （ L はリスニング、 R はリーディング、 $>$ はよりスコアが高いことを示す、以下同じ）であった（ $L: M = 223.69, SD = 63.30$; $R: M = 159.53, SD = 58.44$; 合計 $M = 383.23, SD = 114.61$ ）。203 名の内、 $L > R$ は 189 名、 $L = R$ は 3 名、 $R > L$ は 11 名であった。

この結果を見ると、高専生にとってリーディング力の増強が第一に必要とされるように思えるが、TOEIC に限らず一般的にリーディングの教材は文章も長く、文法構造も複雑で、語彙も高度なものが要求されることが多い。一方で、リスニングのスコアが伸びない理由としては、語彙力不足や文法力不足に加えて、スクリプトを文字で与えられると理解できるにもかかわらず、音声で聞くと理解できない場合も相当数あると思われる。

これには音声からの単語認知の問題とリアルタイム処理の問題が関わるが、統語構造が単純な会話文の聞き取りの場合は、音声からの単語認知力の不足であることが多い^{4), 5)}。TOEIC の得点を上げる近道という観点からはもちろんであるが、第 2 言語習得理論の鉄則である理解可能なインプットを増やす観点からも、高専生にとってリスニングにおける音声からの単語認知力の改善は、取り組むべき重要項目の 1 つではないかと考えた。

以上の考察から本研究では、高専生に対して音声からの単語認知改善のためのいくつかの取り組みを行った後、アンケート調査、リスニングテスト及び単語認知テストを行った。そして、得られたデータを元に高専生のリスニングに対する意識の変化について検討し、リスニング力と単語認知力の相関についても考察を加える。

2. 研究の背景

2. 1 リスニングにおける単語認知の難しさ

高専 4 年生に語彙レベル 1000 語程度の簡単な会話文のリスニングを、学習教材としては比較的速いリスニングスピード（170w.p.m.前後、英国母語話者平均 210w.p.m.前後⁶⁾）に比べると遅いが、TOEIC リスニングの平均スピード 150w.p.m.前後よりははやい）で課すと「まったくわからない」という声上がる。しかし、文字のスクリプトを与えて読ませ、語彙等でわからない部分を質問させると「理解

できない単語はほとんどない」という答えが返ってくる。すなわち、読めばわかるが聴けばわからない、という典型的な音声からの単語認知の問題である。

三橋⁷⁾は大学 1 年生を対象に、大学入試センター試験において、高得点を取っているにもかかわらず、大学入学後始めて TOEIC リスニングテストを受験し、4 割未満の低得点に終わった大学生にリスニングの難しさの理由についてのアンケートを取った結果を報告している。それによると、最も多くあがる理由が、スピードの速さであり、ついで「発音がネイティブすぎて何を言っているのかわからなかった」という感想に代表される「英語らしい」発音であった。これらの事実は日本人英語学習者のリスニングにおける単語認知の難しさをよく表している。

また、壁谷⁸⁾によると、リメディアルレベルの大学生にアンケートを取ると、大部分の大学生が英検や TOEIC のリスニングが苦手であると答える。その際、理由として最も多いのが「速度」であり、これらの学生には進歩が実感できる指導が大事であると主張している。

2. 2 リスニングの過程

リスニングの過程は、大きく分けて音声からの単語認知の段階と認知した単語を元に意味理解をする段階に分かれるが^{9), 10)}、これには音声を元に情報を拾い上げるボトムアップ処理と統語知識・背景知識などを駆使して不足する情報を補うトップダウン処理の 2 処理が密接に関わる¹¹⁾。そして、これらのリスニング過程には、様々な下位技能が関与する。

音声から単語を認知する際にも、音素識別力、音変化への対応や強弱のリズムから音節を認識するなどボトムアップ処理に関わる技能以外にも、統語知識や語彙知識、さらには背景知識や意味理解からのフィードバックを含めトップダウン処理に関わる技能が常に相互に働きかけることではじめて切れ目のない音声を単語に分節化することができる。

リーディングの過程との大きな違いは、次の 2 点に集約される。1 つ目は、リスニングにおいては旧情報は瞬間的に消えてゆき、常に新情報が流入する。従って、ボトムアップ処理から得た情報を短期記憶に保持した状態でトップダウン処理を介入させて、統語分析と語彙検索をしなければならない。すなわち、リスニングにおける情報の一過性は、聴き手に「聴き戻る」ことを許さず、常にリアルタイムでの処理を強いることになる。そして 2 つ目は、文字におけるように音声には単語の切れ目が与えられていない故に、上記に述べた限られた短期記憶の中で、

ボトムアップ処理で得た情報と、統語知識・語彙知識などを総動員して切れ目のない音声を単語に分節化しなければならないことである。

2. 3 英語音声の特徴

このように、英語のリスニングにおいて単語を認知するのは容易なことではない。そして、英語と日本語が全く異なる音韻体系を持つことがさらに単語認知を難しくする。音韻体系の違いは、単に音素体系の違いにとどまらない。英語は典型的な閉音節の音節構造を持ち、子音連続はめずらしくない。一方、日本語は典型的な開音節言語であり、音節構造の基本は L1 習得の際最も容易とされる CV である¹²⁾。さらに、英語は強勢拍リズムであるのに対し、日本語は音節拍リズムであり、日本語と違い、英語は強音節の数で発話の長さが決まる。そして、英語の音節構造とリズムが英語音声において音の変化と消失を頻繁に生じさせる。

従って、日本語とは異なり、英語においては、文字英語と音声英語の差は大きく、文字をイメージして音声を聴くと全く異なる発話時間の短さとリズムに日本人英語学習者はとまどう。そして、実際の発話のスピードではなく、英語の音節構造と強勢拍リズムが生じさせる日本語にはない文字と音声のギャップが、文字学習に慣れた日本人英語学習者に「速い」と感じさせるのである。

2. 4 リスニング力と下位技能の相関

リスニング力と下位技能の関連に関しては、西野¹³⁾、高梨¹⁴⁾、Takashima¹⁵⁾がある。西野¹³⁾はリスニング力は語彙知識と最も関連があり、音声認知との関連はそれに比べると低いとする。一方、高梨¹⁴⁾は音声認知、特に弱音節の識別とリスニング力は強い相関があるとし、リスニング力の向上には弱音節の認知力を向上させることが必須であると主張する。

さらに、Takashima¹⁵⁾は、単語認知とリスニング力は相関があるが、それには語彙知識が前提となるとしている。

3. 研究目的・方法

3. 1 研究課題

本研究における研究課題は次のとおりである。

1. リスニングに必要な下位技能の内、高専生が足りないと感じているものは何か。
2. リスニングの単語認知改善の取り組みにより、

高専生の意識は変わるのか。

3. リスニング力と単語認知力の相関はあるのか。

3. 2 調査参加者

高専 4 年生 142 名を対象に、音声からの単語認知改善のためのいくつかの取り組みを行った後、アンケート調査、リスニングテスト及び単語認知テストを実施した。

3. 3 調査方法

調査参加者には、アルク社刊「究極のリスニング」の中で最も平易な 1000 語レベルのテキストを用いて、リスニングの単語認知について解説を加えながら、書き取りの授業を数回行った。同時に、トップダウンからの処理を促すために、テキストに登場する文法知識・熟語知識を、別の文脈を用いた例文集にしてハンドアウトとして配り、何度も音読して暗記するよう指示した。また、リスニングスピードを機械的に遅くしてリスニングを課し、書き取りをさせると共に、一文ずつの音声のつながりや、音変化についても明示的知識を与えた。

テストは、内容理解のための通常のリスニングテストと、単語の書き取りによるディクテーションテストの 2 種類を課した。リスニングテストには英語検定の 2 級と準 2 級において過去に出題された問題を用いてそれぞれ 30 問ずつ計 60 問出題した。

一方、単語認知テストとしてのディクテーションテストは、アルク社刊「究極のリスニング」の 1000 語レベルのテキストから授業で用いていないものを選び、計 700 語程度のダイアログとモノログを流し、任意の場所でポーズを入れ、そのポーズの直前に認知した単語 4 語を書き取るように指示した。ポーズの時間は 10 秒程度とし、その間に直前に認知した単語を参加者は書き取った。また、ポーズの位置については、書き取られるべき単語の機能語と内容語のバランスがよくなるように考慮してポーズの位置を決めた。

なお、ポーズは計 16 か所設け、採点にあたっては、それぞれのポーズ毎に書き取られるべき単語 4 語×16 か所、計 64 語を分母とし、正解の単語数を分子として、認知率 (%) の形で、採点した。また、正解・不正解の判定について、単語を正しく分節化できていないもの、単語の切れ目で間違えているものは全て不正解としたが、単語が正しく分節化できていて、かつ、音素の区別 (l/r, b/v など) が正しく、音声から単語が正しく認知されていると判断された場合は、綴りが違っていても正解とみなした。

通常のクローズ形式のテストとしなかった理由は、クローズテストでは、スクリプトの文脈からの推測が可能であると判断したためである。

そして、最後に 25 項目からなるアンケート（巻末付録参照）を 5 段階のリカートスケール（Likert scale）で実施した。

4. 結果

4. 1 アンケート結果

各質問項目の記述統計を表-1に示す。調査参加者 142名全員がアンケートに回答した。全ての項目が平均値3を超えると共に、標準偏差が1前後であり、総じて参加者の全員がリスニングの難しさについて十分に認識していることが見て取れる。

なお、質問項目Q14については、質問内容が「リスニングが易しい」旨の内容であるため、これ以降においては、アンケート結果の数値を逆転して分析を進める。

4. 2 探索的因子分析

質問項目に対する回答を入力後、最尤法、プロマックス回転で探索的因子分析を行ったところ、3つの因子が抽出された。また、因子の抽出にあたっては、スクリー基準をもとに固有値の落差、因子の項目内容を考慮した上で、3因子解を採用した。参考までに、抽出された3つの因子のそれぞれの質問項目間の回転前の相関行列を示す（表-2）。また、表-3は、回転後の因子間相関及び各因子の信頼性係数、表-4は、因子パターン行列の表である。

第1因子は「読めばわかる文も聴けば分からない」「リスニングはリーディングよりも難しいと思う」「自分の弱点は、音をきいても単語であると認知できないことにある」等の7項目であったので『リーディングとの差異・音声からの単語認知の難しさ』因子と名付けた。また、第2因子は「リスニングにおける自分の弱点は文法力のなさである」「リスニングにおける自分の弱点は語彙力の少なさである」「リスニングには音声情報と文法力・熟語力・内容からの予測の両方が必要である」等の6項目であったので『リスニングは総合力』因子と名付けた。そして、第3因子は「自分のリスニング力の改善方法のヒントがつかめた」「リスニングに関しての自分の弱点がわかった」「スピードの速いリスニングで練習するのは有効である」等の4項目であったので『リスニング改善のヒント』因子と名付けた。

表-1 各質問項目 (5段階) の記述統計 (n = 142)

質問項目	M	SD
Q1	3.430	1.048
Q2	3.070	0.980
Q3	3.296	0.921
Q4	3.711	1.152
Q5	3.993	1.291
Q6	3.500	1.276
Q7	3.782	1.143
Q8	3.965	1.391
Q9	3.331	1.189
Q10	3.437	1.120
Q11	3.930	1.224
Q12	3.915	1.258
Q13	3.338	1.044
Q14	3.099	0.999
Q15	3.423	1.054
Q16	3.852	1.331
Q17	3.500	1.147
Q18	3.394	1.130
Q19	3.599	1.018
Q20	3.627	1.292
Q21	3.211	1.057
Q22	3.620	1.116
Q23	3.739	1.128
Q24	3.746	1.145
Q25	3.951	1.211

表-2 因子別の質問項目間相関行列表 (回転前, n = 142)

第1因子	Q6	Q7	Q8	Q9	Q11	Q20	Q24
Q6	1.000	.552	.458	.348	.463	.407	.500
Q7		1.000	.673	.434	.638	.554	.505
Q8			1.000	.380	.702	.585	.520
Q9				1.000	.547	.423	.458
Q11					1.000	.629	.559
Q20						1.000	.497
Q24							1.000
第2因子	Q10	Q16	Q17	Q22	Q23	Q25	
Q10	1.000	.500	.475	.435	.523	.424	
Q16		1.000	.601	.673	.725	.739	
Q17			1.000	.466	.551	.554	
Q22				1.000	.800	.663	
Q23					1.000	.697	
Q25						1.000	
第3因子	Q1	Q2	Q3	Q18			
Q1	1.000	.530	.389	.473			
Q2		1.000	.393	.321			
Q3			1.000	.344			
Q18				1.000			

表-3 因子間相関と各因子の信頼性係数 (n = 142)

	第1因子	第2因子	第3因子	信頼性係数 クロンバック α
第1因子	1.000	.654	.163	.879
第2因子		1.000	.144	.896
第3因子			1.000	.729

表-4 因子パターン行列 ($n = 142$)

質問項目の要約	因子		
	1	2	3
Q7 読めばわかる文も聴けば分からない	.948	-.078	.130
Q6 リスニングはリーディングよりも難しいと思う	.666	-.128	.017
Q8 読んでもわからない文は聴いてもわからないと思う	.605	.172	.045
Q24 リスニングにおける集中力維持はリーディングに比べて難しい	.584	.199	.045
Q11 自分の弱点は、音の変化や音が連結する部分が聞き取れないことにある	.544	.368	.000
Q9 自分の弱点は、音をきいても単語であると認知できないことにある	.472	.078	-.146
Q20 概要がつかめても細かい単語が認知できていないことが多い	.417	.129	.074
Q17 リスニングにおける自分の弱点は文法力のなさである	-.131	.977	.110
Q16 リスニングにおける自分の弱点は語彙力の少なさである	.240	.655	-.008
Q23 瞬時に消えていく音声から意味を理解するのは想像以上に難しい	.304	.564	-.023
Q25 リスニングには音声情報と文法力・熟語力・内容からの予測の両方が必要である	.246	.517	.099
Q22 音の鎖を単語に分断するのは想像以上に難しい	.358	.501	-.188
Q10 リスニングにおける自分の弱点は音素の聞き分けができないことにある	.194	.478	.030
Q2 自分のリスニング力の改善方法のヒントがつかめた	-.084	-.023	.779
Q1 リスニングに関しての自分の弱点がわかった	.157	-.045	.688
Q18 スピードの速いリスニングで練習するのは有効である	-.165	.286	.473
Q3 リスニングに関して少し改善したと思う	.113	.058	.472

表-5 因子別アンケート結果 (5段階) ($n = 142$)

因子	<i>M</i>	<i>SD</i>	3.500以上 人数	3.000未満 人数
第1因子 リーディングとの差異・音声からの単語認知の難しさ	3.703	1.252	100	26
第2因子 リスニングは総合力	3.680	1.194	103	28
第3因子 リスニング改善のヒント	3.304	1.027	74	38

表-3にある通り、それぞれの因子について信頼性係数クロンバックの α を調べたところ、第1因子については、 $\alpha = .879$ 、第2因子については、 $\alpha = .896$ 、第3因子については、 $\alpha = .729$ となった。第1因子、第2因子については、十分な信頼性があると判断できる。また、第3因子に関しても、因子内の質問項目間の相関係数が第1因子、第2因子の場合に比べてやや低いものの、信頼性係数を見る限り問題ない値であると判断した。

次に、因子間相関に関して、第1因子と第2因子の間の相関は $r = .654$ と中程度の相関が見られたが、これは第1因子がリスニングにおいてはリーディングにおいて必要とされない下位技能に関わることに關しての因子であり、第2因子はリスニングに関する下位技能全体に関する因子であるので、中程度の相関があるのは妥当であると判断できる。

一方、第1因子と第3因子の間の相関は $r = .163$ 、第2因子と第3因子の間の相関は $r = .144$ とほぼ無相関であったが、第3因子はリスニング力改善のためのヒントに関する因子であり、リスニングの下位技能に関する第1因子及び第2因子とは相関が薄いと思われる、この数値も妥当であると判断できる。

4. 3 因子によるアンケート結果分析

以上のように、探索的因子分析の結果、第1因子『リーディングとの差異・音声からの単語認知の難しさ』因子、第2因子『リスニングは総合力』因子、第3因子『リスニング改善のヒント』因子の3つの因子が抽出された。

これらの因子を下位尺度として計算した各因子別のアンケート結果を表-5に示す。

第1因子『リーディングとの差異・音声からの単語認知の難しさ』因子は $M = 3.703$ ($SD = 1.252$)、第2因子『リスニングは総合力』因子は $M = 3.680$ ($SD = 1.194$)であったのに対し、第3因子『リスニング改善のヒント』因子は $M = 3.304$ ($SD = 1.027$)で他の2因子に比べて若干低めであった。

また、第1因子『リーディングとの差異・音声からの単語認知の難しさ』因子、第2因子『リスニングは総合力』因子においては、調査参加者全体の70%以上(100名以上)が3.500以上であったのに対し、第3因子『リスニング改善のヒント』因子においては、3.500以上の割合は調査参加者全体の約52%(74名)にとどまり、3.000未満の者が約26%(38名)を占めた。

このことは、今回のリスニングに関する一連の取り組みによって、以下のようなことが比較的良好に理解できたことを示す。すなわち、リスニングにはリーディングとは異なる下位技能が必要であること、中でも音声からの単語認知は文字からの単語認知とは違って難しいこと、そしてリスニングにおいては、音素の聞き分け、音変化等の音声認知の技能に加えて、文法力・語彙力・内容からの予測などの総合的英語力が必要であること、などである。

一方で、今回の一連の取り組みを通じて、リスニングに関して自分の弱点を知り、それを改善するための手がかりを得た調査参加者は約半数にとどまり、全体の4分の1程度の調査参加者は、自らのリスニング改善のヒントを得られなかったことが見て取れる。

4. 4 リスニングテストと単語認知テストの結果と両テストの相関

表-6は、リスニングテストと単語認知テストの記述統計である。このデータを元に両テスト間におけるピアソンの積立相関係数を求めた結果を表-7に示す。

相関分析の結果は、 $r = .592$ ($df = 140$, $t = 8.697$, $p = .000 < .001$) となり、リスニングテストと単語認知テストの間には中程度の相関関係が見られた。また、決定係数は $r^2 = .350$ であり、リスニング力の約35%が単語認知力で説明できるという結果となった。

5. 考察

初めに、研究課題1に関して、アンケート結果より抽出された因子の内、第1因子『リーディングとの差異・音声からの単語認知の難しさ』因子の平均値が最も高かった。研究の背景の項でも述べたように、英語においては音声と文字のギャップが大きく、リスニングにおいては必要であるが、リーディングに必要とされない下位技能、特に音声からの単語認知は、文字からの単語認知と違って習得が難しい。この事実について、今回の取り組みを通じて調査参加者には十分理解してもらえたと考えて問題ないようである。

一方で、第2因子『リスニングは総合力』因子についても平均値が高く、リスニングには音素識別、音変化等の音声認知の技能以外にも、語彙力、文法力、予測力などリスニングには英語の総合的能力が必要であると十分に認識できたようである。

表-6 リスニングテスト・単語認知テストの記述統計

テスト	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
リスニングテスト	142	30.796	8.332
単語認知テスト・認知率 (%)	142	38.600	12.203

表-7 リスニングテストと単語認知テストの相関

	リスニング テスト	単語認知 テスト
リスニングテスト	1.000	.592 ***
<i>p</i> 値 (両側)	—	.000
<i>n</i>	142	142
単語認知テスト	.592 ***	1.000
<i>p</i> 値 (両側)	.000	—
<i>n</i>	142	142

*** $p < .001$, $df = 140$

ここでいうリスニングとは、リスニング過程の全てを指すものであるが、研究の背景の項でも述べたように、音声入力を単語に分節化する、すなわち音声から単語として認知をする際にも、英語の総合的能力が必要であることは言うまでもない。その意味で、リスニング力を伸ばすには音声情報からのボトムアップ処理だけではなく、文法知識・語彙知識を参照しながらのトップダウン処理も不可欠であることを認識できたことは意義深いと考える。

次に、研究課題2に関して、アンケート結果より抽出された因子の内、第3因子『リスニング改善のヒント』因子の平均値はそれほど高いものではなかった。今回のリスニングに関しての取り組みを通じて、調査参加者の約半数の意識は変わり、ある程度リスニング改善のためのヒントはつかめたが、リスニングに関する自分の弱点や改善のための手がかりについてまだよくわかっていない調査参加者も少なからずいる、ということが言える。

最後に、研究課題3について、リスニングテストと単語認知テストの間には中程度の相関関係が見られた。今回の調査においては、他にリスニング力を説明する変数を考慮していないため、この結果だけを元に、リスニング力を構成する要素やその重みについて議論することはできない。しかし、今回の結果は、先行研究と大きな矛盾もなく、決定係数を見る限り、単語認知力はリスニングに必須の要素であることだけは確認できた。

リスニングの下位技能の構成要素とその重みに関しては、音声からの単語認知力に加えて、短期記憶の保持力、リアルタイムの処理力など、リーディングとリスニングの差となっている他の要素を考慮に入れたうえで再度調査する必要がある。

6. まとめ

本研究における研究課題は次の3点であった。

1. リスニングに必要な下位技能の内、高専生が足りないと感じているものは何か。
2. リスニングの単語認知改善の取り組みにより、高専生の意識は変わるのか。
3. リスニング力と単語認知力の相関はあるのか。

このうち、研究課題1については、高専生が足りないと感じているのは、音声からの単語認知力が大きい、他にも音素識別力、語彙力、文法力など多くの下位技能の不足の認識が確認できた。この認識は今後のリスニング力改善の糸口になると考える。

次に、研究課題2について、今回のリスニングの単語認知改善の取り組みを通じて、ある程度はリスニング改善のヒントはつかめ、高専生の意識も変わったようである。しかし、依然としてリスニングについての自らの弱点がはっきりしない者も相当数いることは今後の課題となる。

また、研究課題3については、リスニング力と単語認知力の間には中程度の相関が見られた。この点に関しても、リスニングに関わる他の下位技能を考慮に入れた上でリスニング力を構成する要素の再調査が待たれる。

最後に、今回の取り組みは短期間に行ったものであり、回数もそれほど多くは確保できなかった。それ故に、各参加者がリスニングについて、自らの弱点に気づくところまでは持っていくことはできたが、それを改善する段階にまでは至っていない。

英語力の基礎となる受信側の技能の内、リスニング力の向上が大きな意味を持つのは議論を待たない。そして、リスニング力向上のために必要な技能について認識することも重要である。その意味では今回の取り組みは意味があったと思われる。しかし、今度は、いかにしてそれらの技能を身につけさせるかが問題となる。今後、リスニングとその下位技能を身につけるための指導法についての一層の研究が望まれる。

付録

リスニングに関するアンケート

以下の項目の全てについて、

5. とてもそう思う
4. どちらかと言えばそう思う
3. どちらともいえない
2. どちらかと言えばそう思わない
1. 全くそう思わない

の中で当てはまるものにマークしてください。

- Q1. リスニングに関しての自分の弱点がわかった。
- Q2. 自分のリスニング力の改善方法のヒントがつかめた。
- Q3. リスニングに関して少し改善したと思う。
- Q4. これからもリスニングに積極的に取り組もうと思う。
- Q5. リスニング技能の向上はこれからの自分の課題であると認識した。
- Q6. リスニングはリーディングよりも難しいと思う。
- Q7. 読めばわかる文も聴けば分からない。
- Q8. 読んでもわからない文は聴いてもわからないと思う。
- Q9. リスニングにおける自分の弱点は、音をきいても単語であると認識できないことにある。
- Q10. リスニングにおける自分の弱点は、音素の聞き分け (l と r, b と v など) ができないことにある。
- Q11. リスニングにおける自分の弱点は、音の変化や音が連結する部分 (love him → lov' im など) が聞き取れないことにある。
- Q12. リスニングにおける自分の弱点は、単語であると認識できても、新しい情報が次々に現れては瞬時に消えるスピードについていけず意味理解できないことにある。
- Q13. リスニングにおいて聞き取れないのは、スピードが速すぎるからである。
- Q14. スピードさえ遅ければ、リスニングの聞き取りは簡単であると思う。
- Q15. リスニングにおける自分の弱点は、聴いても前の内容を忘れることにある。
- Q16. リスニングにおける自分の弱点は語彙力の少なさである。
- Q17. リスニングにおける自分の弱点は文法力のなさである。
- Q18. スピードの速いリスニングで練習するのは有効である。
- Q19. 自分のリスニング理解度は音声のスピードが速いか遅いかによって大きく影響される。

- Q20. 概要がつかめても細かい単語が認識できていないことが多い。
- Q21. 個々の単語は認識できるが、全体の意味がつかめない。
- Q22. 音の鎖を単語に分断するのは想像以上に難しい。
- Q23. 瞬時に消えていく音声から意味を理解するのは想像以上に難しい。
- Q24. 英語の音声を長時間聴き続けて意味理解をしようとするための集中力維持はリーディングに比べて難しい。
- Q25. リスニングは、音声からの情報と、文法力・熟語力及び内容からの予測、の両方があると初めてできると感じた。

- 13) 西野達雄: What influences success in listening comprehension? *Language Laboratory*, 29, pp. 37-52, 1992.
- 14) 高梨芳郎, 「聴解力の諸側面」 *Language Laboratory*, 19, pp. 1-12, 1982.
- 15) Takashima, H.: Accuracy of spoken word recognition as a predictor of listening comprehension for Japanese learners of English. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 9, pp. 87-95, 1998.

(2015. 9. 10 受付)

参考文献

- 1) 文部科学省, 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」 Retrieved Sep. 2, 2015, from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf, 2013.
- 2) Ellis, R.: Interpretation-based grammar teaching. *System*, 21(1), pp. 69-78, 1993.
- 3) 白井恭弘, 『英語はもっと科学的に学習しよう』 東京: 中経出版, 2013.
- 4) Carrier, K.: The social environment of second language listening: Does status play a role in comprehension? *The modern Language Journal*, 83(1), pp. 65-79, 1999.
- 5) Rubin, J.: A review of second language listening comprehension research. *The Modern Language Journal*, 78(2), pp. 199-221, 1994.
- 6) Tauroza, S., & Allison, D.: Speech rates in British English. *Applied linguistics*, 11(1), pp. 90-105, 1990.
- 7) 三橋峰夫, 「TOEIC®IP テストと 2015 年大学入試センター試験のスコア比較分析調査」 大学英語教育学会第 54 回国際大会鹿児島大会口頭発表資料 2015 年 8 月 30 日 鹿児島大学, 2015.
- 8) 壁谷一広, 「英語リメディアル教育に有効な活動: 習熟度が低い学生のリスニング力向上を目指した授業改善から」 『リメディアル教育研究』 第 2 号(1), pp. 13-18, 2007.
- 9) Buck, G.: *Assessing listening*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001.
- 10) Richards, J. C.: Listening comprehension: Approach, design, procedure. *TESOL Quarterly*, 17(2), pp. 219-240, 1983.
- 11) Field, J.: Bottom-up and top-down. *ELT Journal*, 53(4), pp. 338-339, 1999.
- 12) 窪園晴夫, 「音韻論」 三原健一・高見健一編『日英対照英語学の基礎』, pp. 1-30, 東京: くろしお出版, 2013.